望高い先生の粉骨砕心のご尽力には頭がさがります。
いつまでも長生きしていただきたかった先生の死は、惜しみても余りあることと存じますが、生者必滅会者定離で、天命とあきらめるほかはありません。
先生は決してなくなったのではありません。生前の人格ご功績は庶民の心の中に生き、いつまでも感化を与え導いて下さることでありましょう。
何卒安らかにごめい福の程お祈り申します。

忘れ得ぬ人

御手洗　一　而
（会員・川越市）

先生は人間の襞にあやしい光沢をもつ不思議な人でした。
山を愛し野花をめで、吹きよせるそよ風にそっと手を出す。田畑を耕して土に親しみ、小川で鰻と戯れ、人間をこよなく愛して、書斉に入ってペンをとる。こう書けば、一見、どこにでもいる好々爺に見える。
私がその一人の先達に魅せられたのは何であろうか。それは単なる人間性というよりも、一口で言えば「歴史の顔」である。
歴史といえば、故きを温ねがちであるが、現在社会では作られつつあり、未来へは始動の日々である。この一連の時間帯のどこにでもとびこめるのが先生であった。
「御手洗君。弥生時代の米作りはこうやったもんだよ。中世の庶民は、こうやって土間に莚を敷いて寝たもんだよ」
ごろっと土間に寝ころんだ先生の声が、今にも聞こえそうである。
「見る。聞く。ために歩き。遺す」
それが、自然に天性の勤めのように、神の思召しのように、日々繰り返された。
それは、何学の範疇に入らない、いわば、森羅万象学の自然体に見受けられた。
「理屈はいゝじゃないか、御手洗君。古代から先人の生活があってこそ、理論や体系づけが芽ばえるんだよ。とにかく精一杯生きることから始めよう」とでも言いたげに。
先生は、「生活史」という「歴史そのものの顔」をもっていた。その点では、単なる学者や研究者のような整

理屋ではなかった。

その顔が、先生の人間の襞の一つ一つに得体のしれない光彩を放ち、私には「生きる美しさ」に映った。

一体、私を魅了したその「生きる美しさ」は何だったのだろうか。

今度帰郷の時、一度「人生」について、ゆっくりお話を伺いたいと思っていた矢先、先生は永遠に口を閉ざしてしまった。

先生、時には夢の中に現われて下さい。

そして、「美しき生き様」をご教導の上、ゆっくり天国の話でも聞かせて下さい。

羽柴　弘先生をしのんで

神野　幸人
（会員・鎌倉市）

十月二十日夜、佐伯帰省中の柏市の姫野ヨシ子様より羽柴先生逝去の電話があり、時を同じくして川越市の御御手洗一而兄からも電話あり、惜しい人を失ったと長嘆息した。

四十七年秋帰省の折、染矢健一先生と二人で城山に登り林檎をかじりながら三時間程、昔話や歴史、近状をおききしました。そのとき佐伯史談会と羽柴先生のことをお教えいただき帰宅して入会申込、早速送られて来た『佐伯史談』第八五号（昭和四十七年十一月十五日）以来十年、第百二八号まで八冊のアルバムに整理して時折々に読んでいます。

五十四年八月、羽柴先生上京の内報、先生からも〝上京の節は三人で一杯やりましょうな〟と御手紙いただき楽しみにしていましたところ、十一月五日、上京出来なくなったとお連絡があり、がっかりしました。

五十五年三月十六日、法事で佐伯に帰省。早速、竜護寺の羽柴先生を訪れました。日曜日は教会にお出かけの由とてお待ちする間、五寸程に延びた青々とした麦畑の彼方の城山を写真にとっていた処、麦畑の尽きる番匠川の高い土手より、〝おーい〟と自転車の方が声をかけてくれました。羽柴先生である。初対面だが私達夫婦の旅姿でそれを知ったのでしょう。早速座敷に通され、コタツに入り、奥様の御料理を御馳走になり、お話をきき、庭で写真をとり楽しい数時間を過ごしました。

今年の春、先生お病気とて御見舞の手紙を差出した処、